2116　離島覚書（長崎県・野崎島）

令和３年 11 月 17 日

町営船はまゆう

博多港からのフェリー・太古（野茂商船）は早朝４時 40 分に小値賀港に着いた。朝早く到着する顧客のためにターミナル内に仮眠室が用意されており、そこで横になったがよく眠れない。フェリーでもほとんど眠れなかったので寝不足が気になる。

野崎島には以前、六島を訪れた時に寄ったことがあるが、日程の関係で、船から一歩島に上陸して、数分滞在しただけで小値賀島に戻った経緯がある。今回はしっかり島を巡ることにしていた。野崎島は小値賀島の属島で小値賀町に属している。後述するように 2001（平成 13）年に最後の島民が島を離れてから無人島になっている。にもかかわらず、連絡船が運航されているのは、無人島を観光資源として小値賀島の活性化を図りたいという狙いからだ。

野崎島には町営渡船の「はまゆう」が１日２便通っている。午前便が小値賀発７時 25 分、午後便が 14 時 30 分である。午前便で行けば、日帰りができるが、午後便の場合は島に泊まらなければならない。後述するように島には旧小中学校の校舎を活用した野崎島自然学塾村があり、ここに宿泊できる。ただし食事の提供はないので、自炊することになる。

「はまゆう」の発着場所は宇久小値賀漁協の前にある船溜まりなのでそこまで歩く。アイランドツーリズム協会のガイド、迫（さこ）さんが待合室にやってきた。はまゆうは７時 25 分に小値賀町の笛吹港を出発、六島を経由して野崎島に向かう。乗客は私と迫さんの２人だけだった。野崎島は小値賀島の東 2.5 ㎞に位置するので直線距離を行けばあまり時間を要しないが、船は野崎島の北端を回って六島に寄港、東側中央部にある野崎漁港まで大きく迂回するため約 35 分を要する。

六島では唯一の島民になってしまった小金丸梅夫さんが乗船した。小値賀島かあるいは

本土に用事があるのだろう。７年前に六島を訪れたときにお会いしたことがある。ＪＩＣＡで働いていた人で、定年退職後、生まれ故郷の六島を何とかしようと頑張っておられる。その後アイランダーでもお会いしたことがあった。

長崎県では新型コロナの新規感染者が 10 日以上も出ていないのに船内ではマスクの着用を要請され、船内の移動も制限された。日本人は画一的な対応が好きだ。

船の乗組員は２人で乗客も２人、料金は片道 500 円だから、とても船の運航は採算に合わない。町営船でなければ成り立たないわけだ。

８時ちょうどに野崎島の野崎漁港（第１種）に到着した。野崎島は面積 7.11 ㎢、周囲 15.4 ㎞の南北に細長い島である。小値賀町には無人島を含め大小 17 の属島があるが、その中では最も面積が大きく、小値賀島の半分強に相当する。島に島の中央部付近がくびれており、その東側に漁港が整備されている。

町営渡船・はまゆう（左）、島の東岸中央付近につくられた野崎漁港（右）

３つあった島の集落

野崎島にはもともと３つの集落があった。野崎漁港の周辺に形成されていたのが野崎で、神道の集落であった。島の中央部のくびれた鞍部に形成されていたのが野首、もう一つが島の南端にあった舟森で、この２集落は禁教令が撤廃された後に入信した復活キリシタンの集落であった。

このうち野崎の集落が最も古く、島の北部に位置する沖ノ神嶋（おきのこうじま）神社の神官職の屋敷を中心に発達し、同神社の維持を目的に形成された集落とされている。野首は、大村藩外海（そとめ）地方から開拓民として五島列島に移住してきた潜伏キリシタンのうち、福江島の三井楽や久賀島（ひさかじま）から二次的に移住してきた人々によって 1800 年ごろに形成された。この集落には鉄川与助が手がけた野首教会が現存している。舟森は 1846（弘化２）年ごろに、処刑されかけていた外海地方のカクレキリシタン３人を小値賀島の廻船問屋・田口徳平治が救済して野崎島に開拓者として住まわせたのが始まりで、その後人が増えて集落へと発展した。

1960（昭和 35）年時点の野崎島の世帯数は３集落あわせて 133 戸、人口は 676 人に及んだ（野崎地区：62 戸、391 人、野首地区 22 戸、133 人、舟森地区 29 戸、152 人）。しかし 1962 年ごろから急速に減り始めた。1966（昭和 41）年に船森の最後の６戸が小値賀島に移住、1971（昭和 46）年には野首の最後の６戸が北九州などの町外に移住したため、野崎集落だけに人が住んでいたが、2001（平成 13）年に最後まで残っていた神職が島を離れ、野

崎島は無人島になった。

2015（平成 27）年国勢調査時の人口は１世帯１人と記録されているが、この１人は後述する「島守」の前田さんである。小値賀島に家があり、住民票はそちらに置いているが、年間のうち半分ほどは野崎島に泊っているので、調査時点でたまたま野崎島にいたことによる。したがって野崎島は実質的に無人島のままなのだ。

おぢかアイランドツーリズム協会

野崎島には人が住んでいないので、事故防止の観点から入島に際してはあらかじめ「ＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会」に届け出る必要がある。そしてツアーガイドの案内で島内を歩くのが原則になっている。

同協会の窓口はターミナル内にあり、６時 30 分に窓口があいたので、すぐに手続きをしていた。事前に連絡しておいたから私用のカードホルダーがすでに用意されていた。

野崎島のガイドツアーは、①野崎島ガイドツアー、②舟森トレッキング、③王位石トレッキングの３つのコースが用意されている。

野崎島ガイドツアーは島の中央付近の旧野崎と野首の両集落周辺を巡るコースで、②は島の南端の旧舟森集落までトレッキングするコースになっている。③は島の北端まで縦走するコースで往復５時間以上を要する。高齢者には③のコースは厳しいことと、旧集落を是非とも見ておきたいという動機から舟森トレッキングコースを予約したのである。

舟森トレッキングコースのガイド料は 7,700 円（税込、複数で申し込めば 4,400 円と割安になるが、この日の申込者は私１人だったので割高はやむを得ない）であった。ちなみに野崎島ガイドツアーは 7,700 円、王位石トレッキングコースは 9,900 円である。

ツアーガイド・前田さんと野崎島自然学塾村

野崎漁港には、この日お世話になるツアーガイドの前田さん（60 歳）が軽トラックで迎えに来ていた。迫さんは管理の任にあたる「野崎島ビジターセンター」に直行した。小値賀島に戻る船には、昨日、「野崎島自然学塾村」に泊まったご夫婦が乗り込んだ。

前田さんが運転する軽トラックに乗り、野首集落にある自然学塾村に向かう。道路は一応舗装されているが、軽トラがぎりぎり通れるほどの狭い道で、しかも曲がりくねった急坂だ。左側は断崖絶壁で下は海。こんな道を慣れているとはいえ物凄いスピードで走る。一応ワイヤーを張ったガードレールごときものはあるが、ひとつ誤れば海へ真っ逆さまである。港から急坂を登り、やがて急な下り坂になって、旧小中学校跡に着いた。途中、冷や冷やしどうしだったが、前田さんは涼しい顔をしている。

野崎島自然学塾村は、1985（昭和 60）年に閉校になった旧小値賀小中学校野崎分校を再利用した簡易宿泊施設で、宿泊室、トイレ、浴室、炊事棟などが完備されている。宿泊費は 3,500 円（税込）だが、食事は自炊しなければならない。日帰りの休憩利用の場合は 1,000 円（税込）である。また旧校庭にはテントサイトも用意されているので、キャンプも可能だ。

ガイドの前田さんはこの施設の塾長であり、１人で野崎島の管理を担う「島守」である。前田さんは小値賀島の出身で、小値賀漁協に 23 年間勤めた。佐世保市と小値賀町の合併話が持ち上がった時に、合併に賛成していた当時の組合長と意見が合わず、漁協をやめて野崎

島を守ろうと 2007（平成 19）年に塾長に就任、以来、ふるさとの自然を守るために頑張ってきた。

この施設は、2009 年から「ＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会」が小値賀町より管理者に指定され、前田さんは同法人のメンバーとして管理に当たっている。

塾長の前田さん（左）、野崎島自然学塾村の全景（右）

野崎ダム

トイレで小用を済ませ、杖を借りていざ舟森へと出発した。前田さんはリュックを背負い、やはり杖を持っている。シカが入るのを防止するため旧小中学校の敷地はネットのフェンスで囲われていた。

フェンスの扉を開けて急坂を登ると眼下に比較的大きな貯水池が現れた。野崎ダムと呼ばれている。このダムを建設した時に、縄文、弥生、古墳、中世の遺物を包含した遺跡が発見されており、この発掘調査の報告書が町教育委員会によって「野首遺跡」としてまとめられている。今では無人島になっているが、太古の昔から人が住む島だった。それだけ住みやすい土地だったのだろう。

野首ダムの全景（左）、山道に沿ってつくられた集水用の水路（右）

このダムの水はじつは小値賀島に送られている。小値賀島は比較的平坦な土地が多く、昔から農業が盛んだった。しかし最も高いところでも 111m しかなく、山が少ないことから水の確保が難しかったのである。一方、野崎島は標高 300m前後の急峻な山地が南北に連なっており、平地はほとんどなく山ばかりだから水は豊富であった。この水を貯めて小値賀島に送れば、小値賀島の農業の発展に貢献できるわけだ。そんな発想から野崎島にダムがつくら

れた。ただ川はないので、山の斜面に沿っていく筋かの水路がダムに向かってつくられている。この水路を通じてダムに水が集まる。

ダムの工事は 1989（平成元）年に着工し、2001（平成 13）年に竣工している。貯水量は 287,000 トンである。約３㎞先の小値賀島まで海底送水管によって送水されている。

二次林

野首から舟森までの道のりは約１里（４㎞）ほどである。平坦なところは全くなく、山を登って下り、再び登って下る。歩き出したころは階段がつくられており、道が整備されていたが、やがて大きな岩がゴロゴロと転がる林間の山道となった。

小値賀島は高い山がなく比較的平坦な島であるのに対し、野崎島は 300ｍほどの山が連なり、森林資源は豊富である。したがって小値賀島の人たちは燃料の薪や炭を野崎島から調達していた。前田さんによると、山は区分され、燃料として木を定期的に伐採したため、植生の遷移は進まず、２次林だという。林を構成する樹種はヤブツバキ、ヤブニッケイ、ユス（イスノキ）、ヒサカキなどである。特にヤブツバキとユスは硬いため炭に向いたようだ。山に小屋を建て、炭を焼いて小値賀島に持ち帰っていた。なお山の境は海まで延長され、磯の水産物まで及んだそうだ。山道の脇の大きな岩に「サカイ」という文字が彫られていたが、このような境を示す石が山中にたくさんあるようなのだ。

野崎島の南部はこのように「里山」として利用され、いわゆる「２次林」に覆われているのとは対照的に、神社のある北部はタブやスダジイを中心とする照葉樹の原生林となっている。おそらく神社のある森林は人による利用が妨げされていたためだろう。

山道の脇に電柱を切断した跡が等間隔で続く。舟森に電気の送電が始まったのは 1967 年のことであった。宇久神ノ浦から六島経由で海底ケーブルが敷設され、六島、野崎、野首、舟森の各集落が 24 時間配電を受けるようになった。その名残の電柱が根元から切られている。しかしこの時点では舟森は廃村になっているので、果たして電柱が実際につかわれていたのかどうか怪しい。

サカイと書かれた山中に転がる大きな石（左）、石と二次林の中を歩く（右）

舟森の子供たちは毎日歩いてこの山道を通っていたわけで、とりわけ小学校１，２年生はさぞかし大変だっただろう。島の小中学校が野首に統合されるのは 1960（昭和 35）年のことなので、これ以降廃村になるまで、子どもたちはこの道を通った。

帰り道、この林の中にムベの木があった。前田さんは目をつけていたのであろう。帰り道、

このムベを収穫した。私はムベよりもアケビの方が好きだが、九州ではムベが好まれているのかもしれない。また、お墓に備えるヒサカキの木もたくさん採った。

旧舟森集落

ひとまわり若い前田さんのペースではきついので、マイペースで歩く。アップダウンの山道を２時間ほどかけて 10 時ごろに旧舟森の集落跡に着いた。野崎島は中通島の津和崎鼻から最も近いところで 500mほどしか離れていない。この瀬戸から 400～500m東の斜面に舟森の集落が形成されていた。２年前に中通島を訪ねた折、津和崎の展望台から野崎島を眺めたことがある。舟森の集落は瀬戸の脇にあったことから、「瀬戸脇」とも呼ばれてきた。

集落跡に白い十字架とともに「舟森郷縁起」と書かれた案内板が立っていた。田口家 10 代目の田口富三郎氏が記したものである。

これによると、1845（弘化２）年頃、平戸藩御用達の廻船問屋を営んでいた小値賀島笛吹村の田口家４代目徳平治は、大村藩外海に寄港した際、明日は捕らえられて処刑されるというカクレキリシタン（案内板には切支丹と書かれているが、）の親子（十造といった）３人と運命的に出会う。警戒する彼らから事情を聞き出した徳平治は意を決して３人を説得し、停泊中の船内に潜ませて出港しようとしたところ、怪しんだ役人に厳しい詮索を受けたが徳平治の機転と度量によって危機を切り抜け無事に小値賀島に連れて帰ることができた。その後、徳平治は３人を使用人として届け出て、機会を待ってこの地に開拓者として住まわせたという。

この場所は急斜面が海に迫る厳しい地形だったが、逆に人目を避けるには絶好の地であった。十造父子とその後加わった人々によって急斜面が開拓され、集落が形成されたのであった。

入植者は山の急斜面をツルハシとモッコで切り拓き、段々畑をつくった。水が十分確保できなかったから田はなく、畑だった。海から海藻を採取し、肥料として加え、麦、菜種、馬鈴薯、人参などを栽培し、半農半漁で生計を立てていた。そして塩害や野生のシカによる食害などの試練に耐えた。

野崎島に関する年表によると、舟森の弥吉、幸次郎、船吉の３人が野首の忠兵衛とともに長崎の大浦天主堂に初めて行き、1867 年に洗礼を受け、復活キリシタンに改宗する。禁教令が解除される以前だったので、キリシタンであることが知られると、全員が平戸に連行され、算木責の刑を受けたそうだ。1873（明治６）年にキリスト教が解禁になると 1881（明治 14）年に瀬戸脇教会が建設された。聖堂と司祭館が併設されていた。その跡地が、斜面の下の方にあった。教会は最後の人が去った 1966 年に閉鎖された。聖堂は大島に移築されたが、現存しない。司祭館は小値賀島に移築され、現在はカトリック小値賀教会として利用されているという。

小学校は集落の最も高い位置にあった。その校庭が現在も残る。斜面に石垣を積み、人力で平地を造った。現在に生きる人にはとてもできない所業である。1895（明治 28）年に小学校の分教場が設置され、1899（明治 32）年には分校の校舎が新築されている。さらに 1936（昭和 11）年には小値賀尋常高等小学校舟森分校の校舎が新築落成した。しかし 1960（昭和 35）年には野首地区に３集落の分校を統合して小・中学校ができたことから、舟森集落

の分校は廃校になり、子どもたちは山道を歩いて野首まで通うことになった。このことが廃村へ拍車をかけたようだ。

舟森集落の世帯数は、1908 年当時 17 戸であったが、その後分家により増加、戦後の 1960 年には 29 戸 152 人に膨れた。しかし小学校がなくなるのを契機として、1965 年には 13 戸 80 人に急減し、1966 年４月には残っていた全世帯が小値賀島に集団移転し、廃村となった。前田さんの同級生に船森の出身者が１世帯いたという。

集落の跡はシカが草木を食べ、人に代わって草刈りをしてくれているようなものだから、段々畑や家の敷地がはっきりと当時のままの姿で見ることができる。家の敷地の跡には、五右衛門風呂の鉄釜や鍋、ジャー、食器の破片などたくさん転がっている。

小さな沢を挟んだ反対側にキリスト教の指導者の水方の屋敷跡がある。水方はカクレキリシタン時代の洗礼を授ける役職のことで、復活キリシタンが誕生する以前、舟森はカクレキリシタンの集落だったと思われる。

現場で 15 分ほど休み、野首へと引き返す。

集落背後の段々畑の跡（左）、人力によって造成された小学校分教場跡の敷地（右）

旧野首集落

往復約４時間を要し、野首集落跡に戻ってきた。ダムの近くでは数人の工事関係者が作業をしていた。野崎島が観光地になったので、島内の電線の地中化を進める工事が行われているとのことだ。

野崎島の中央部付近に標高約 40mの低い鞍部があって、ここを境に島は二分されていることはすでに述べた。野首の集落はこの鞍部に形成されていた。旧集落の中心に旧野首教会が建つ。後述するように野首の集落跡は舟森と同様、シカによって草木が食べられているので、家があった敷地や周辺に広がる段々畑が昔のままの姿で残っている。シカがいなければ当然樹木で埋もれてしまったことだろうが、逆にシカのおかげで昔のままの集落の姿をみることができるという訳だ。周囲に樹木が全くないことから旧野首教会は非常に目立ち、野崎島のシンボルとして様々な観光パンフレットに掲載されている。

この教会は 1908（明治 41）年に建てられたもので、五島地方の教会建築の第一人者である鉄川与助が手掛けたものである。教会の天井が傷んでいるとのことで、中に入れなかったが、入口から中を覗いた。小さなステンドグラスが印象に残る。この教会の建設費は集落の信徒がキビナゴ漁で得た収入を貯めた資金が当てられたそうだ。

1800 年代（江戸時代後期）に入り、松太郎ら３人が野崎南風泊で開墾を試み、後に野首を移したのが、野首の潜伏キリシタンの始まりだった。五島地方の潜伏キリシタンは 18 世紀後半に大村藩の外海地方から開拓民として移住してきたのだが、野首の場合は、福江島の三井楽や久賀島からの移住者を祖先とする人々が二次的な移住地として野崎島を選んだ。つまり直接ではなく、２次移民だったのである。おそらく元の集落の人口が増えて「口減らし」をしなければならなかったのかもしれない。

なおこの野首の農地は、西海捕鯨の初期の時代の一翼を担った小値賀島の小田伝兵衛重利（小田家の資料は小値賀町歴史民俗資料館に残されている）によって 1703（元禄６）年に新田畑の開発が行われている。その農地を野首の人たちが活用して農地とした。つまり舟森は樹木を伐採して畑を開墾したのに対し、野首の場合はもとからあった段々畑を活用したものだった。

上述したように舟森の弥吉、幸次郎、船吉とともに長崎の大浦天主堂に行き、ここで洗礼を受けて復活キリシタンとなっているが、野首からは忠兵衛が洗礼を受け島に戻って布教し、野首はカトリックの信者の集落となった。

戦後のピーク時（1957 年）には、野首の人口は 129 人に増えたが、高度経済成長期に入ると、都市部への出稼ぎや移住者が急増し、1970 年には 42 人に減少、1971 年には最後まで残っていた６戸が北九州方面に集団移転し、廃村となった。

旧野首集落の教会と旧小中学校（左）、石垣を積んで造成された農地跡（右）

シカとイノシシ

旧小中学校跡の学塾村の休憩室で昼食を食べる。小値賀島の船客ターミナルで購入した菓子パンと学塾村内の自動販売機で購入した缶コーヒーで軽く済ませた。休憩室にダムを作った時に発掘された野首遺跡の記録図書が置かれていたので、パンを食べながらながめた。休憩後、港までは写真を撮りながらブラブラと歩くことにした。

旧小中学校からのきつい上り坂の途中にイノシシの箱罠が置かれていた。野崎島には野生のニホンジカに加えてイノシシが生息している。舟森へのトレッキングの途中でもイノシシが掘り返したところを見たが、かなり数が増えているらしい。野崎島には 1707（宝永４）年の時点でイノシシがいたという記録が残されているが、その後途絶えて近年は全くみられなかったらしい。前田さんによると、５～６年前に海を泳いで渡って来たイノシシが棲みついたという。イノシシが島にいることがわかってから、箱罠を仕掛け、半年間ほどで 61

頭を捕らえて処分したそうだ。しかし数はいっこうに減っていないという。

帰り道の峠からは眼下に野首海岸を見ることができる。広く白い砂浜が拡がり、海の透明度はきわめて高い。コバルトブルーの海は沖縄の海を連想させる。しかし海底の岩は透けて見えるが海藻はひとつもない。磯焼けというよりもすでに沖縄の亜熱帯の海が北上してきたという感じである。

峠を越えたあたりからシカが現れた。以前は 700 頭ほど生息していたようだ。しかし、シカのいい餌場であった場所にダムをつくったために餌が減少、このため現在は 400 頭ほどに減っているという。シカは昔から生息する在来種とする見方がある一方、京都や奈良から移入した説もあるようではっきりしたことはわからない。港に近づくほどに確認できるシカの数は増えてきた。屋久島や口永良部島、厳島などでも野生のシカに会っているが、野崎島のシカは毛が黒っぽい。現在は繁殖期でこの時期は黒ずんでくるらしい。

兎に角、このシカのおかげで草や木が繁らず、昔の集落跡や段々畑をみることができるわけで、素晴らしい景観はまさにシカのおかげなのだ。シカのかわりを人間がするとなると、膨大な費用と労力を要することになる。

「野崎島の集落跡」は 2018（平成 30）年に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を構成する資産の一つとして世界文化遺産に登録されている。他の構成遺産の集落跡は木々に埋もれてしまっているところが多く、野崎島のように壮大な集落跡を現認できるのはまさに貴重な存在といえる。そしてこれを担保しているのがシカなのだ。しかし問題はイノシシである。こちらは土を掘ってミミズを食べるから、土地が荒らされ、昔の石垣を崩してしまうのだ。崩壊跡がかなり目につくようになっている。野崎島においてはこのイノシシ対策をしっかりやらないと、シカによって維持されてきた貴重な景観が台無しになりかねない。

旧野崎集落内で遭遇した立派な雄シカ（左）、石垣が崩され赤土が露出する段々畑（右）

旧野崎集落

峠から坂を下り切ると野崎漁港に出た。漁港の周辺に旧野崎の集落跡が残る。野崎島で最も古い集落がこの野崎であった。704 年に成立したと伝える野崎島「沖ノ神嶋神社」の維持を目的に形成された集落とされている。舟森と野首が江戸時代に移住してきた「カクレキリシタン」によって形成されたのに対し、野崎はもとから野崎島に住んでいた人々の集落である。江戸時代初期の 1647 年には 18 戸、52 人が住んでいた。1707 年には 17 戸、72 人が住

み、牛 19 頭が飼われていたという記録も残っている。

この集落は「親家」と呼ばれる沖ノ神嶋神社の神職の屋敷を中心に組織されていたとされ、仏教寺院の檀徒は皆無で、住民の全てが神道を奉じていたとされる。

舟森と野首はすでに廃村になってから半世紀以上が経つので、廃屋は全く残っていないが（島を去るときに家は取り壊したのかもしれない）、野崎集落の場合はかなりの家が廃屋としてそのまま放置され、生活の跡が生々しく残る家もある。

舟森も野首も、明治維新後に禁教が解かれ、復活キリシタンが生まれるまでは、両集落の島民は日本型に変質し土着宗教に変貌したカクレキリシタンであったから、神道や仏教とも習合していたので、神道の集落である野崎と舟森、野首が宗教を巡って対立があったわけではなかった。

島の生活は不便であったが、野崎集落は港に近く、他の両集落よりも相対的に恵まれていたから島を出ていくのは遅れた。高度成長期以降、野崎集落の人々も本土側に移住するようになり、主として岡山や広島方面に移住した。1985（昭和 60）年に小中学校が閉校になっていることからこの時点まで子どもがいたようだ。そして 2001（平成 13）年に最後まで残っていた沖ノ神嶋神社の神官が島を去って廃村となり、同時に野崎島は無人島になった。

石垣が組まれた野崎の集落跡（左）、生活用品を放置したままの廃屋（右）

ビジターセンター

港の正面に「野崎島ビジターセンター」が置かれている。小値賀町が 2017（平成 29）年４月にオープンした施設で、ＮＰＯ法人おぢかアイランドツーリズム協会が指定管理者になっている。

町営船・はまゆうの第１便が着いた後の８時 15 分から２便が出発する前の 15 時まで開いている。上述したように協会のガイドを務める迫さんがこの日は終日詰めていた。第１便で島に着き、戸締りをして第２便で小値賀島に戻る。

このセンターは野崎島の自然と文化の保全、来島者の安全確保、遵守事項や島の自然・歴史などの周知を目的としており、センター内には野崎島に関する資料やパネルが展示されている。またトイレも整備され、船の待合室の機能も兼ねている。

小値賀町は古民家を活用した宿泊施設の展開など、地域資源を活用した観光振興を展開しているが、野崎島においても無人島の歴史と自然を観光資源として活用し、地域おこしにつなげようと頑張っているわけだ。

野崎集落の裏手は広い草原になっており、あちこちに鹿がいる。木がまばらにあるだけで、シカの食圧によって草原化したようだ。草が食べられて赤土がむき出しになっている土地も多い。学塾村から少し登った斜面に、シカが当然食べそうもない棘のある灌木が群生していた。シカが食べそうもない植生が拡大しつつあるようだ。シカの存在は既存の植生を確実に変えているわけであり、人によるコントロールが必要になる時期が来るかもしれない。

草原の一角に、崩壊した墓地があった。墓石が崩されていることから、野崎集落の人々が島を去るにあたって墓じまいをして先祖の墓を移住場所に移したのだろう。その一角にレンガで囲われた墓地があったが、何れも岩坪家の戦死者の墓だった。

野崎島ビジターセンターの外観（左）、草原の一角にある墓地の跡（右）

沖ノ神嶋神社の神官邸

王位石トレッキングコースは往復５時間以上を要するから舟森トレッキングコースの両方を回ると２日間必要である。野崎島に続けて宇久島と宇久島の属島の寺島を回る予定だったので、沖ノ神嶋神社と王位石は残念ながら、別の機会に譲ることにした。

沖ノ神嶋神社は 704（慶雲元）年に、元来１つの社であったものを小値賀の近浦と野崎島の北端の山中にわけで祀ったと伝わる由緒ある神社である。この神社は代々岩坪家が神官を務めており、その屋敷が野崎集落の中に残っている。

沖ノ神嶋神社の神官は江戸時代初期から岩坪家が務めている。この家は 1896（明治 29）年に他所から移築されたもので、岩坪家の代々の屋敷として使われてきた。しかし当家が 2001 年に島を去り、その後放置されていた。傷みが激しかったため、小値賀町は岩坪家から屋敷跡を買い取り、修繕を進めてきたが、2017（平成 29）年に整備が終わった後は、一般に公開している。

建物は木造一部２階建てで、主屋の建築面積は 219 ㎡。屋根は瓦葺きである。主屋は内玄関を入り、ニワ（土間）がある。ニワより東側に向かい、上り口、次の間、座敷という接客の間が続く。座敷は特別な場所で、来賓のもてなしや神道の祭事の際に使用された。上り口から北に向かい、３畳間、4.5 畳間、茶の間、台所、納戸が配置され、屋敷の暮らす家族の生活空間であった。茶の間は炉を囲みながら食事をとる場所だった。

屋敷に隣接して神社の遙拝所が置かれている。悪天候の時はここから山の神社を拝んだらしい。この遙拝所の厨子の中に「疱瘡安全」と書かれた御守護があるそうで、沖ノ神嶋神社の主祭神である鴨一速王（かもいちはやのみこ）は三韓征伐で戦功を挙げたことから海の向こうの外敵を撃退す

る力があるとされ、疱瘡もまさに日本を脅かす外敵そのものだったという発想である。

神官屋敷の外観（左）、同屋敷の上り口と内部（右）

エコツーリズム

ちなみにビジターセンター設立以降に、野崎島を訪れた観光客は、2017 年度：3,366 人、2018 年度：4,971 人、2019 年度：4,038 人、2020 年度：1,609 人と推移している。2020 年度は新型コロナウイルスの影響で大幅に減ったが、それ以前は 5,000 人ほどがこの無人島に来ていたのである。

野崎島を訪れる観光客の目的は、上述してきたように①旧集落の生活の跡、②教会と神社、③原生林と二次林、④野生のニホンジカ、などである。つまり、野崎島の自然、歴史、文化などの地域固有視点が観光の対象なのだ。これらの資源の保護・保全を図りながら、地域経済への波及効果を実現しているわけで、まさにエコツーリズムの概念を実践しているといえよう。

島におけるエコツーリズムの先駆は御蔵島で、父島や座間味島などでもさかんであるが、無人島におけるエコツーリズムの展開は野崎島が最初と思われる。

このエコツーリズムを支えているのが、行政と上述したＮＰＯ法人との連携だ。小値賀町が野崎島自然学塾村、野崎島ビジターセンター、神官屋敷を整備し、これら施設の指定管理者が協会という関係である。また野崎島のガイドは協会が一手に引き受けている。

エコツーリズムは自然・歴史・文化などの地域固有の資源を生かした観光をそれらの資源が損なわれないよう、適切な管理に基づいて保護・保全することであるが、無人島は地理的にこれらの概念を実現しやすい条件を有するものと考えられる。

第１に島に渡るには船を利用しなければならないから、出入口の港が「関所」の役割を果たして管理しやすく、入島者数を適正化できること、第２にツアーガイドの利用を義務づけることにより、島内での観光客が管理を適正化できる。

一方、①宿泊や飲食の地元への投下、②ガイド料収入、③船の利用料、④各種施設の利用料収入などが期待できる。つまり地域資源の保全と地域経済効果が両立しえるのである。加えて、ツアーガイドやＮＰＯ法人を担う人に若いＵ・Ｉターンの人たちが多い。保全と収入の両立に加えて、若い人材の島への加入という効用も見逃せない。彼らが地域資源を学ぶことで、知識が伝承されるという好循環が生まれている。

第２便で小値賀島に出て、この日は同島に泊まった。